

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：34426

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380722

研究課題名(和文) 19～20世紀初頭におけるアイルランドの人口と家族構造の総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive Study of the Irish population and family structure from 1th century to early twentieth Century

研究代表者

清水 由文 (Shimizu, Yoshifumi)

桃山学院大学・社会学部・教授

研究者番号：40132352

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：19世紀から20世紀初頭におけるアイルランドの家族構造をアイルランドのセンサス個票にもとづいて明らかにした。つまり、アイルランドの家族は、19世紀には核家族システムにもとづく核家族形態が優位であったが、1845年の大飢饉以前のころから、直系家族システムにもとづく直系家族形態に変化した。直系家族システムの要因は、持参金、縁組婚、不分割相続であった。

研究成果の概要(英文)：I clarified Irish family structure from the 19th century to early 20th century based on the census returns of 1821, 1901 and 1911. In other words, as for the Irish family, the nuclear family form based on the nuclear family system was dominant in the 19th century, but changed into the stem family form based on the stem family system before the Great famine in 1845. The elements of stem family system were dowry, matchmaking and non-division inheritance.

研究分野：家族社会学

キーワード：アイルランドの家族 センサス個票 直系家族 持参金 縁組婚 不分割相続

## 1. 研究開始当初の背景

歴史人類学者のトッドは『新ヨーロッパ大全』で、アイルランド家族が直系家族に一応該当するとみなしながらも、つぎのような疑問を2か所で提起していた。すなわち、「アイルランドは全体として権威主義的性格が強いことは民族学者の間では周知の事実だが、このことも確認された。しかし、無視できない微妙な差異が明らかになった。つまり、縦型の家族構造は特に島の周辺部において明瞭であり、内陸部にはより核家族的な自由主義的形態が存続しているということである〔1992、56〕」、と「もう1つの修正はアイルランド内陸部に関わる。この地方は相続慣習と複合家族の地図の上では、非平等主義的で、核的となっていたが、絶対核家族の第一地帯の中には加えられていない。研究の現状からするなら、この地方が絶対核家族地方なのか、それとも単にこの島で支配的な直系家族が、周辺部に比べて縦方向においてやや明確さと強さを欠いているだけなのか、いずれとも決めがたい〔1992、61〕」という疑問を呈し、「この問題を本当に解決してくれるような詳細な地方モノグラフがなかったため、私としては、家族型の最終地図の上に疑問符を残す方が良いと判断したのである〔1992、61〕」という結論にいたっている。

つまりトッドは、アイルランドの家族を全国的に直系家族であることに対して、素晴らしい疑問をすでに提起していたのである。

しかし研究代表者はアイルランドの家族が直系家族であるとアイルランド全体に認められるが、そこに地域性が存在したという観点からアイルランド家族を捉えた。つまり19世紀後半頃から20世紀初頭のアイルランドにおける直系家族の成立に東部アイルランドと西部アイルランドに地域的ヴァリエーションが認められたのであり、そのように理解することにより彼の疑問に解決を与えることができる。

## 2. 研究の目的

アイルランド家族研究の先鞭をつけたアレンスバークとキンボールによる先行研究をとおして、研究代表者は次のようなアイルランドにおける家族変化の仮説を提起した。すなわち19世紀初頭にはアイルランドの家族は土地保有の分割相続システムにもとづいた核家族が支配的形態であったが、19世紀中ごろより、1845年におけるジャガイモの胴枯れ病による大飢饉、小作人の追放にともなう地主の囲い込みによる土地の統合、地主による土地分割の抵抗、耕作地の枯渇、アイルランドにおける工業化の未発達、ベルファスト周辺でのプロト工業化であった麻の家内工業の崩壊などを契機として、農民の保有地が分割相続から不分割相続に相続システムが変化した。その変化にともない相続は一子相続になり、家長は特定の後継者を指名し、ある段階で相続させる。その相続システムと持参金システムと結びついた縁組婚との結合により理念的には直系家族が形成されるという規範およびその規範を支持する家族状況が整備された。

持参金と縁組婚システムは大飢饉以前にすでに直系家族規範として存在したといわれるが、相続システムの変化は、フィッツパトリックの1852年説、コリンズの1850年以降説、グリーンによる大飢饉以降の変革説などを考慮すれば、われわれは1840年以降の相続システムの変化に伴って直系家族が形成されたという仮説を提起できよう。そして直系家族規範の形成後、家長は土地や農業労働に対する統制権を強くもち、それらの統制権を維持し続け、家名を土地に残したいという強い意識が生じた。しかも、現実には家長がそれらを保持し続け、後継者の指名、指名した後継者への家産の権限委譲を延期させる傾向にあった。

その結果息子たちは親の体力の衰えや死亡まで結婚や相続を待つことを強いられ、そ

こに晩婚化あるいは未婚化が顕現した。それに当時アイルランド全体で生涯独身者や晩婚化が浸透してきたことも影響した。後継者に指名されなかった息子たちは少しの金銭を得てダブリン、ベルファスト、コークの都市で就労するか、イギリス、アメリカへ移民するか、あるいは家に残留するという選択をしなければならなかった。したがって 19 世紀末から 20 世紀初頭にアイルランドでの直系家族規範が一番強くみとめられた時期であった。

以上のように核家族システムが直系家族への変化を理解したうえで、アイルランドの家族が、持参金と縁組婚システムおよび不分割相続システムが形成される 1840 年以降から大飢饉前後にかけて大きく変化し、20 世紀初頭にはそれまでの核家族ではなく直系家族が一番顕著に認められたということを明らかにすることが本研究の目的である。

### 3. 研究の方法

ここで利用するデータは、アイルランド国立文書館で保存されている、1821 年のセンサス個票（残存されたセンサスのみ）のデータベース、1901 年と 1911 年のセンサス個票の 100% データベース（研究代表者の作成）である。1821 の残存するデータは、キャヴァン州、ファーマナー州、ゴールウェー州、キング州、ミーズ州の 5 州であり、キャヴァン州が人口、世帯割合で一番多く、44% であり、他の州が 13% ~ 7% 台であったので、そこにデータの地域的バイアスが存在する。そして、アイルランドの 1901 年と 1911 年の 100% センサス個票のデータであるが、そこに GIS の方法とデータのリンケージ化を活用することによりアイルランドにおける直系家族形成をより明確に把握することができる。具体的には、土地保有規模、農業経営、人口学的変数（独身者、婚姻率、出生率、死亡率、婚姻年齢）、世帯主の年齢、世帯規模、世帯形成、親族数の変数を用いている。

### 4. 研究成果

(1) 1821 年におけるアイルランドの家族構造を明かにするには、ミーズ州、キング州を、第 1 地域、キャヴァン州とファーマナー州を第 2 地域、ゴールウェー州を第 3 地域であるとみなして分析した。その結果は以下のようである。19 世紀初頭のアイルランドの家族は、核家族システムにもとづく核家族形態が優位であった。しかし、現実には直系家族形態も存在する可能性もあるが、それは家族状況的要因により支持されたものであり、しかも核家族システムにおけるライフサイクルから説明することができる。そして、そのような家族状況的要因の相違が地域性、職業（農業、労働者）の 카테고리により発現するものと判断した。

ミーズ州とキング州で、大保有農が地主による功利的経営に対応して、穀作から牧畜化の農業経営に漸次傾斜していった。そして、相続が分割ではなく、継承者以外の子供たちは一部不動産あるいは動産を取得し、早い段階で離家あるいは移民した。すなわち、彼らは周辺都市で商店や大工、石工、樽職人などのある職人に従事するか、外国への移民として他出した。後継予定者は農業に従事しながら、相続を待機し、相続後に親の取り決めによる結婚を未来の幸運と考えていた。それに対して、労働者は、大規模農で就業するか、他の職業に従事した。その結果、彼らは特定の収入があれば婚姻することができたが、その婚姻による将来性を夢見たのではなく、それが当面彼らの家族戦略とみなされた。その結果、大土保有農の場合、複合家族世帯が、労働者の場合に単純家族世帯が優位であるが、そこに、それぞれの家族戦略にもとづく性格が内包されていたものと判断できる。

キャヴァン州とファーマナー州では、ランドイール制にもとづく分割により、保有規模が少ない、小・中規模保有の農民が優位な形態とみられた。農民が中規模以上であれば生活

できるが、小規模の場合、彼らには農業と麻の家内工業の混合形態が認められた。つまり、彼らはリネンの家内工業である敷布工、紡糸工に従事するという家族戦略を採用した。彼らは、早い段階で土地保有の分割に対応して、婚姻も早くすることが戦略に組み込まれており、彼らの世帯は単純家族世帯が優位な形態であった。

ゴールウェー州は、やはり分割相続が支配的形態であったが、小保有農のため、農業のみでの生計が不可能で、麻の家内工業、漁業、農業・道路勤労者という多様な職業に就労していた。そのような貧困地域での世帯者は、老後の扶養のために、早く相続させるよりは、子供の相続を待機させ、子供もそれに対応した行動をしていた。その結果、予想と反して、複合家族世帯が多く認められたのである。しかし、その形態は世帯のライフサイクルに対応したものと理解される。

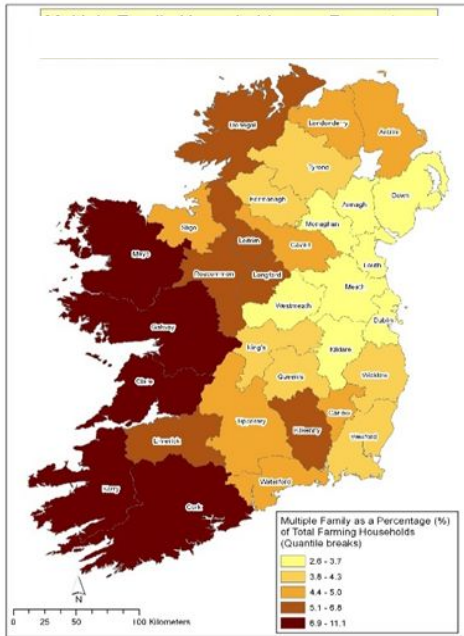
以上から、20世紀初頭における世帯構造は、基本的に農業の経済的相違にもとづく地域性と農業と労働者の職業カテゴリーに規制されたものと判断された。そして全体的に土地分割にもとづく小保有農、中規模農で、単純家族世帯が優位であるが、大規模農の場合に複合家族世帯が優位になり、労働者も早婚による単純家族世帯を形成したが、それらの構造は核家族システムによるものと判断される。しかし、家族状況的要因により、それが核家族形態ではなく、直系家族形態になる可能性も認められた。そして、ミーズ州のような大規模農地域では、19世紀中頃から直系家族システムに転換する状況がすでに準備されていたとみるべきであろう。そのように解釈することにより、核家族システムから直系家族システムにスムーズに転換プロセスを位置づけることができる。また、ゴールウェー州のような小規模保有地域であっても、複合家族世帯が形成されているが、その構造は核家族システムにもとづくものであると

理解できる。

(2) アイルランドの家族が19世紀中ごろまでの核家族システムから、それ以降直系家族システムに変化し、直系家族が形成された。しかし、そこに西部アイルランドと西部アイルランドで直系家族形成に地域的ヴァリエーションが存在したという仮説を提起した。それは以下のように要約できるであろう。

西部アイルランドは婚姻率が東部アイルランドより低いにもかかわらず、高出生率、低死亡率であった。1870年代以降生涯独身者がアイルランドで浸透し始め、それがレンスター地方、アルスター地方で顕著に認められ、その要因が世帯形成率の低下に導いた。コノート地方とマンスター地方で生涯独身者が増加したものの、多産と低死亡率によりカバーされ、他の地方より世帯規模が大きかった。そしてコノート地方とマンスター地方で人口の自然増が認められるものの、アメリカへの移民の多さが人口減少という人口構造を示していた。

西部アイルランドで生涯独身者年齢が1901年より1911年が高くなったが、それは世帯主が家長権を維持したことによる。そして、世帯主は後継者に早い段階で継承させずに未婚のまま待機させたことが晩婚化や未婚化を導いた。とくに西部アイルランドの世帯がその性格を強く内包させていたが、それは後継者の継承の待機による晩婚化、さらに後継者以外の子供の移民としての排出が「幸福な状態」とみなす家族戦略であった。他方東部アイルランドは後継者以外の子供がダブリン市、ベルファスト市の国内での就業やアメリカ、イギリスへの移民も容易であった。また東部で土地なし農業労働者、サーヴァントが多く、彼らは経済的要因により家族形成の可能性があったが、独身の選択も存在した。そして彼らの世帯が単純家族世帯を形成し、それが直系家族形成の阻止要因であった。



**地図 1 . 多核家族世帯の分布**

世帯形態が西部アイルランドのコノート地方とマンスター地方で拡大家族世帯 と多核家族世帯 (地図 1 参照) が 1901 年で 18.2% と 18.9% (農民 20.4% と 24%)、1911 年で 19.4% と 18.6% (農民 21.7% と 26.5%) であるのに対して、アルスター地方とレンスター地方を含む東部アイルランドでは 1901 年で 17% と 16.6% (農民 19.5% と 19%)、1911 年で 14.4% と 13.8% (農民 17% と 18.9%) であった。つまり、それは西高東低を示し、その数値が農民の世帯で 4 地方で共通して高く、しかも拡大家族世帯 と多核家族世帯の割合が 1901 年より 1911 年の方が多かったものと理解された。しかも農民の割合は西部アイルランドが高い。

以上から東部アイルランドよりも西部アイルランドに直系家族が強く顕在化し、それはペザントという自給的農業形態の小中規模農業地域で形成された。しかし、ここでいう西部アイルランドは厳密に言えばコノート地方とマンスター地方の一部 (クレア州とケリー州) を示している。他方商業的農業社会である東部アイルランドで直系家族の形成がみられるものの、ダブリン市、ベルファ

スト市という労働市場に近接しており、離家が容易であるとともに、ダブリン港やダンドーク港からの移民が可能であったという家族状況的要因や土地なし労働者が世帯形成時に単純家族世帯の形態の可能性が高く、また、生涯未婚者の増加により家族形成の可能性が低いことにより、その結果、直系家族の形成度が低くなったものと理解することができる。

さらにリンケージ・データから、西部アイルランドで単純家族世帯から典型的な直系家族である多核家族世帯へ転換の性格が認知されたが、それが東部アイルランドで弱かった。つまり、西部アイルランドの家族は直系家族規範が強く、それを家族状況的要因により支持された構造であったが、東部アイルランドは、直系家族規範が認められるものの、それを支持する家族状況的要因が弱い構造であったと判断された。

以上から、19 世紀中頃まで核家族システムにもとづく核家族が優位であったが、それ以降直系家族システムにもとづく直系家族が優位になるという変化が検証されたのである。

#### 5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7 件)

1. 清水由文、「Household Structure in Early Nineteenth Century Ireland」、『桃山学院大学総合研究所紀要』、査読なし、42 - 1、2016、1 - 31 .
2. 清水由文、「Regional Variation in Household Structure in early 20<sup>th</sup> Century Ireland」、『桃山学院大学総合研究所紀要』、査読なし、41 - 1、2015、19 - 54 .
3. 清水由文、「The Structure of Irish Households of Early 20<sup>th</sup> Century: Comparing Results for Co. Clare and Co. Meath」、『桃山学院大学社会学論集』、査読なし、48 - 2、2015、27 - 61 .
4. 清水由文、「20 世紀初頭におけるアイルランド・メイヨー州における世帯構造」、『桃山学院大学総合研究所紀要』、査読なし、39 - 2、- 2、2015、1 - 24 .
5. 清水由文、「Family Structure in the City

of Dublin in Early 20<sup>th</sup> Century」, 『桃山学院大学社会学論集』、査読なし、48 - 1、2014、1 - 32.

6. 清水由文 「Changes in Families in Ireland from the 19<sup>th</sup> Century to the Early 20<sup>th</sup> Century」, 『桃山学院大学社会学論集』、査読なし、47 - 2、2014、1 - 24.

7. 清水由文 「Transition of Irish Household Structure: Comparing Results from the 1901 and 1911 Census Returns, with Reference to Two Cases of Glencolumbkille and Clogheen」, 『桃山学院大学社会学論集』、査読なし、47 - 1、2013、1 - 34 .

〔学会発表〕(計3件)

1. 清水由文、Household Structure at Early 20<sup>th</sup> Century Ireland, Social Science History Association, 2015年11月13日、アメリカ、ボルチモア .

2. 清水由文、The Irish Family Structure at the Early 20th Century, with Particular Reference to the Differences between the Western Ireland and the Eastern Ireland, Social Science History Association, 2014年11月8日、カナダ、トロント .

3. 清水由文、The Irish Stem Family at the Early Twentieth Century to the Patriarchal Head and his Heir, Social Science History Association, 2013年11月21日、アメリカ、シカゴ .

6 . 研究組織

(1)研究代表者

清水由文 (Shimizu Yoshifumi)

桃山学院大学・社会学部・教授

研究者番号： 4 0 1 3 2 3 5 2

(2)研究分担者

(3)連携研究者